



直木賞受賞宴において 著者

ああ戦友

佐藤愛子



ああ戦友

昭和四五年三月三〇日 第一刷

定価四五〇円

著者 佐藤愛子

発行者 檜原雅春

発行所

株式会社

文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話二六五―一二二一(代表)

印刷 大日本印刷

製本 矢嶋製本

※万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

©1970 AIKO SATO

PRINTED IN JAPAN

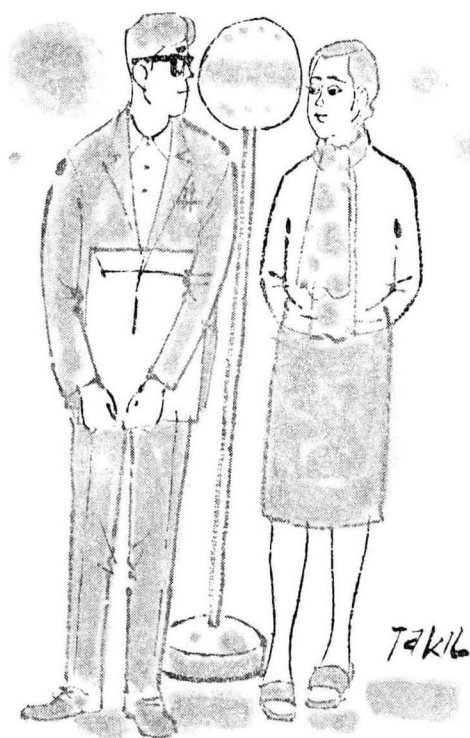
目次

ああ戦友		5
豚は天国へ行く		61
おばはん、寝まホ		117
奮闘旅行		147
浮気のいましめ		185
総統のセレナート		213

カ装
ット
ト 幞
秋
野
卓
美

あ
あ
戦
友

ああ戦友



寒い頃だったと思う。あるいは寒さが終りかけた頃か、それともこれから寒くなつて行くという頃だったかもしれない。とくに冬の真只中ではなかった。

私は仲間の挿絵画家やイラストレーターと安い酒場で酒を飲んでいた。その席になぜ安場堅次がいたのか私にはわからない。気がつくと安場がいた。安場は酒が飲めないのでトマトジュースを飲んでいた。

一人のイラストレーターが、ポケットから銀色の小さな鍵を取り出して傍にいた酒場の女に見せていた。

「どうだい、きれいな鍵だろ？」

「わあ、すてきねえ！」

女が叫んで手に取った。鍵は銀色で、頭に実に繊細な飾り彫りがしてあった。

「何のキイ？」

「何だと思う？」

イラストレーターはちよつと得意そうにいった。

「さるクラブの鍵だ。秘密クラブの……」

鍵は手から手へと渡って行つた。別の男がポケットから金色の鍵を出して見せた。

「これもきれいだろ」

と彼はいった。それは彼が酒を預けているクラブの、酒棚の鍵だった。別の男がもったいぶつてロッカーの鍵を出した。

そのとき、安場が一つの鍵を出した。ぶの厚い真鍮の、その真鍮色が黄ばんだ、最も単純で古い型の鍵だった。何ということなしに皆は笑つた。

「君らしいや」

誰かがいった。

「アパートの鍵ね、相当古いアパートね」

と酒場の女がいった。

その言葉は唐突に私を突き刺した。あるイヤな感じが私の中にひろがった。例えば難治の病の

正体を告げられたときのように、信じていた友人から絶交状を受け取ったときのように、私の胸はどうしようもなく、みるみる閉ざれて行った。——この鍵の向うに安場の巢がある……

その思いが私の頭に浮かんた。安場はこの鍵を廻して、その巢へ帰るのだ。そこに彼の若い妻と赤ン坊がいる。彼と若い妻と赤ン坊の三人で作っている世界がそこにある。私の知らない安場がそこにいる。彼はその巢を守る。彼は巢の主だ。あそし若い妻と赤ン坊を守る。当り前のことだ——私は鍵からも安場からも顔を背けたままだった。鍵は執拗に、いつまでもテーブルの上にあった。私はそれに耐えた。それは永遠につづく時間のように思われた。

もう二年近く、夫の帰宅はいつも夜半を過ぎていた。たまに十時頃に帰ってくるがあると、私は驚いていった。

「どうしたの？ 何かあったの？」

夫が経営している会社は広告宣伝関係の中小企業で、テレビコマーションも作れば展示会やウインドウディスプレイ、店内改装もするという会社だった。あんまり何でもかでも引き受けるので、儲からないのだという人もあれば、

「大木戸さんのような人にも事業欲があったとはねえ」

とへんに感心する人もいた。夫は二十年来、ずっと売れない油絵を描いていたが、画家仲間や

批評家の中には純粋な抽象画家として夫の才能を認めている人もあったのである。

夫はマージャンが好きだった。だから夫の帰宅が遅いのは、会社の忙しさのほかにマージャンをやっている場合も少なくなかった。会社の運転手は私にそのことを仄めかした。そんなとき、私はただ、

「へえ、そう」

というだけだった。私は仄めかすとか、あてこずるとか、直截でないことはすべて嫌いだ。

「夜の夜中まで、毎晩毎晩、雄策さんはいったい何をしてるんやろう」

同居している私の母はいぶかしんだ。

「打ち合せや、仕事やいうたかて、相手さんがそんな時間まで起きてはるのかいな」

母の疑問の中には、夫への猜疑心がこもっている。

「起きてるんでしようよ。大木戸がそういうからには、そうなんでしょうよ」

と私は苛立つて高い声を上げた。私は人を疑うことが嫌いだ。たとえそれが嘘であってもいい。私は疑い穿鑿するよりは欺される方を選ぶ。

あるとき、会社から私のところへ電話がかかって来た。

「社長は今日はお休みでございますか？」

その前日、夫は昼すぎに社を出て、そのまま行く先がわからなくなった。夜になって、昔友達

の植田二郎に誘われてマージャンをしているという報らせが入ったので、私は気にも止めずいたのだが、その電話でそのまま翌日も社に出ていないことがわかった。

「植田二郎さんのお宅へ電話しましたら、マージャンは植田さんのお宅でしているのではなく、植田さんの叔父さんに当られる方の、二号さんのところだそうでした、そこには電話がありませんということ……」

午後になって会社からそういつて来た。その無表情な声に、私はその女子社員の方への怒りを感じた。夜、私はバケツに風呂の残り湯を汲んで待っていた。十一時頃になって表に車の止る音がし、夫の靴音が前庭の敷石を歩いて来た。小児麻痺の後遺症で左脚の短い夫の靴音はすぐにわかる。私はバケツを下げて廊下を玄関へ走った。私が勢に任せて玄関のドアを開けたのと、夫が玄関の踏石に足をかけようとするのと同時だった。月明りの中の夫の正面めがけて、私はバケツの水をほうり出した。水はずっしりした手応えで、小気味よく私の手を放れて夫の胸に当たった。二十何年か昔、防空演習で訓練されたときの、焼夷弾消火のコツがまだ消えずに生きていた。夫は水に当ってよろめいた。

「何だ、何だい」

忽ちズブ濡れになって彼はいった。しかし私が期待したほど驚愕した声ではなかった。途端に、
「恥知らず！」

と私は叫んだ。夫が打ちかかってくるものと思つて階段を駆け上り、手摺りの上から顔を突き出して叫んだ。

「遊び半分に仕事をやるのはやめて下さいー」

「何だよう、何だつていうんだよ、いったい……」

夫は玄関に立つてモゾモゾと足を動かしていた。私は少し拍子ヌケした。そうして私を拍子ヌケさせたことで、新しく夫に腹を立てた。

「靴の中に水が入つて脱げねえよ」

へんに日常的な声が、階段の上から覗いている私の興奮した耳に聞えて来た。私は子供部屋へ入った。何のために子供の部屋へ入つて行つたのか、私にはわからない。ベッドの中で笑いが気持よさそうに眠っていた。興奮した目で私はその寝顔を見た。

夫が二階へ上つて来た。子供部屋の入口に立つて、スタンドの仄明りの中にいる私を見た。その身体から雫がポタポタと音を立てて床に落ちた。

「何してる、そんなところで」

平静な声で夫はいった。その平静さが、私の怒りを煽った。

「脱いだらどうなの、それを――」

私はどなった。

「水死人の幽霊じゃあるまいし……」

夫は背広を脱ぎ、ネクタイを取った。

「いやね、植田の叔父貴が負けちまってね。負けてるものだから放さないんだよ。会社で金を借りてるだろ、勝ちっ放しで帰るわけには行かないんだ……」

「ああ、そうですか、そうなの、そう……」

私は待ちかまえていていった。

「あなたのマージャンは勝つと帰れないマージャンなの、マージャンに負けるまでは、たとえ女房子供が殺されても帰れないってわけですか」

「また、また、……どうしてそう飛躍する……」

夫はいった。

「なんで殺されるところまで話が行くんだ」

私は出る限りの声を出した。

「あなたは社長でしょう！ 一家の主でしょう。社長としての責任、一家の主としての責任をどう考えてるの？ その責任を取ることも出来ないのなら、一人前に父親になったり亭主になったりしなければいいのよ。まして社長になんか……とんでもない話だわ。社会に害毒を流します……」

「そう大きな声を出すなよ。笑子が始まる」

「起きてもいいの、いえ、笑子に聞かせてやります。どういう男が男のクズか、見本を見せて将来のためによく教えてやります」

「どうもいうことが大げさだな、正子は」

夫は苦笑していった。

「とにかく謝るからかんべんしてくれよ。な？」

それから夫は思い出したように濡れた背広のポケットを探って、リボンのかかっている小箱を取り出した。

「こいつも少し濡れたな」

夫はいった。

「さっき植田が奥さんにつてくれたんだ」

餌食に飛びかかるライオンのように私はそれをひったくった。それから力まかせに窓を開け、遠く午前一時の夜空に向って投げた。小箱は庭の楠の太木を越えて隣の庭に落ちる音がした。犬が吠えた。

その後、私はその話を、ある作家の出版記念会の二次会の席でした。その場には安場堅次もい